生産・技術 4

鳥羽離宮
―殿・堂の基礎工事―

http://www.kyoto-arc.or.jp
（財）京都市埋蔵文化財研究所・京都市考古資料館

金剛心院九躰阿弥陀堂の石積基壇

基壇の部分が盛り上がっているのがわかる。手前横方向に並んだ大きな石は柱を据えた礎石。

鳥羽離宮が洛南の地に造営され始めたのは、応徳 3 年（1086）7 月頃からである。その様子を『扶桑略記』は、あたかも都を遷すようなありさまであったと伝えている。造営は、白河天皇によって着手され、白河天皇亡き後も鳥羽天皇によって精力的に行なわれた。その結果、離宮内には御所と御堂が次々に建てられた。たとえば、南殿と呼ばれた所には檜皮葺きの寝殿造り建物と証金剛院と名付けられた瓦葺きの御堂が、北殿には同じく御所と勝光明院と呼ばれた御堂が建てられた。この他にも、泉殿－成菩提院、東殿－無量寿院（九躰阿弥陀堂）、田中殿－金剛心院など、御堂が御所と結び付くかたちで造営されていった。こうした造営は、開始から約 70 年ほど続けられた。

鳥羽離宮跡では、ここ数年の間に実施した発掘調査によって、多くの殿舎とその間をぬうように造られた苑池などの庭園遺構を明らかにしている。そのなかでも御堂は苑池の汀近くに建てられている例が多い。御堂は、瓦葺きの場合が多く、建物の重量が重くなることから、地盤が軟弱な水辺近くに建てるのには不都合な点が多い。

こうしたことから、鳥羽離宮では、建物の造営に際して一般的にあまりみることのできない基礎工事の工法がとられている。

今までに確認した基礎工事の工

法は次の3種類である。

① 東殿に造営された、苑池の西岸部から南岸にかけて行なわれた東殿-無量寿院（九躰阿弥陀堂）跡の工法である。この工法は、東西約50 m・南北約70 mに及ぶ範囲に玉石を積み上げて突堤状にしたものを2列で一対となるようにし、その間を埋め立てるものである。

② 金剛心院釈迦堂跡や九躰阿弥陀堂跡で発見した工法である。この工法は、建物を建てる位置に建物の大きさより一回り大きめの方形の穴を掘る。そして、この穴の中へ玉石を短冊形に区切りながら全面に並べる。その後、玉石の上に粘土を10cm前後かぶせるように入れ、叩き締める。この作業を交互に実施し、最後は地表面より盛り上げて基壇状にする。その途中で、建物の柱の位置に礎石を据え付ける工法である。

③ 田中殿跡や金剛心院一間四面堂跡で検出している。この工法は、②に類似しているが、玉石を並べる単位も小区画であまり整然としていない。

これらの工法に共通する点としては、まず第一に粒の揃った多量の玉石を用いていること、第二に玉石を区画しながら整然と並べていることをあげることができよう。なかでも、①と②は玉石をある単位で整然と並べ石垣のように積み上げている。基礎工事として、地盤の軟弱さや建物の構造により異なる工法が採られたと考えることができる。こうした工法が、いつ頃から始められたかについては明らかでないが、平安京とその周辺で盛行したのは12世紀頃であったと考えられる。同様な工法を他にも高陽院跡や六勝寺の一寺である延勝寺跡などで確認している。高陽院跡では池を埋め立てて陸部とするのにこの方法を用いていた。

11・12世紀は平安京の内外で大規模な建物が次々と造営された時期である。こうした建物の建造にあたる技術者たちが、施工主の要求に応えて新しい抜術を生み出していったことは想像に難くない。

ここにみた手間のかかる基礎工事の工法も、軟弱な土地に大規模な建物を建てるために生み出され、発達した技術と評価することができよう。

①の工法

②の工法

③の工法

①の工法細部

②の工法断面

高陽院での工法